

## [報告] 第28回歴史地震研究会参加記

横浜市史資料室\* 吉田 律人

### Impression Report of 28th General Meeting

Ritsuto YOSHIDA

City of Yokohama Municipal Archives Reference Room

Yokohama City Central Public Library, Oimatsucho 1, Nishi-ku, Yokohama, 220-0032 Japan

#### §1. はじめに

2011(平成23)年9月16日(金)~18日(日)の三日間の日程で、第28回歴史地震研究会が新潟市及び上越地方において催された。初日の16日は新潟市の新潟大学駅南キャンパス「ときめいと」を会場に研究発表会(第1日目)と総会、翌17日も同会場にて研究発表会(第2日目)とシンポジウムが行われ、両日ともに100名を越える参加者があった。また、筆者は都合により参加できなかったが、18日は上越地方において高田地震に関する巡見も行われ、そちらの方も盛況だったようである。16日、17日ともに大きな天候の崩れはなく、また、地震災害に対する社会の関心も高まっているため、多くの会員や市民、地元メディアが集まった。人々で溢れる会場の空気からも3月11日に発生した東日本大震災の影響が窺え、歴史地震研究の重要性を改めて認識することができた。

さて、本年2月に入会した筆者にとって、今回の研究会が初めての参加となる。当初、歴史学の学会と異なる雰囲気戸惑いつつも、理系・文系の学問領域を問わない報告内容は極めて新鮮であった。加えて、私事で恐縮だが、高校時代までを過ごした郷里・新潟での本研究会の開催は、来年度の行事幹事(第29回歴史地震研究会、2012年9月14~16日、横浜開催予定)の仕事と合わせて、個人的に感慨深いものがあった。第1日目と第2日目の状況に限られるが、本稿では、歴史学を専門とする筆者の視点から第28回歴史地震研究会の一端を紹介したい。

#### §2. 第1日目(研究発表会・総会)

研究初日となる16日は、最初に東日本大震災及び台風12号の犠牲者に対する黙祷の後、午前10時か

ら「歴史地震全般」、「関東の地震」、「越後の地震」、「東海トラフ地震」のテーマごとに22本の口頭報告が行われた。加えて、午後には幅広いテーマのポスター発表8本も行われ、歴史地震に関する理学、地震学、地理学、地質学、地形学、情報学、社会学、歴史学の最新の研究が発表された。文系の立場では、なかなか理解が追いつかない報告もあったが、報告者と聴衆の間で議論となる報告もあり、非常に刺激的であった。また、夕刻には本年度の総会が開かれ、北原系子氏から武村雅之氏への会長職交代と同時に、本研究会の一年間の活動状況についての報告が行われた。報告にあった会員数の増加からも3月11日以降の社会状況の変化が感じられた。さらに同日付の『新潟日報』夕刊一面や翌17日の『読売新聞』新潟版にも本研究会の開催が報じられるなど、開催地の関心の高さも窺え、1964(昭和39)年の新潟地震や過去の津波記録に注目が集まっていた。

#### §3. 第2日目(研究発表会・公開シンポジウム)

前日に引き続き、二日目の午前も歴史地震に関する様々な研究報告が行われたほか、本研究会の創設者である宇佐美龍夫氏から「歴史地震について(遺言にかえて)」と題した講演もあり、歴史地震研究の方法論などが提示された。筆者自身も歴史学研究に携わる者として歴史地震研究の現状や現在の防災問題に対して何ができるのか、色々と考えさせられるところがあった。

さらに午後には、公開シンポジウム「歴史地震から防災を考える 東日本大震災を踏まえて」が催され、日本海側の津波や新潟市の液化化問題など、過去の災害経験から現代に繋がる地震災害の問題が4

\* 〒220-0032 横浜市西区老松町1 横浜中央図書館内  
電子メール: r-yoshida\_sisi@drive.ocn.ne.jp

人の講演者によって語られた。一般参加者からの積極的な質問も多く、また、翌18日の『読売新聞』新潟版が「道路の液状化対策急務」と題して、新潟地震から新潟市域の液状化問題を検証したト部厚志氏の報告を取り上げるなど、開催地の反響も大きかったようである。

こうした開催地における本研究会の公開シンポジウムは、各分野の研究成果を社会に還元するだけでなく、防災意識を地域社会に普及させる観点からも意義ある活動だと考える。来年度の研究会はもちろん、それ以後の研究会においてもぜひとも継続して頂きたい。



公開シンポジウム会場の様子

#### §4. 研究会の感想

最後に今回の研究会に対する筆者の所感を述べて参加記の責めを塞ぎたい。2日間の日程を通じて最も感じたことは、学問分野を越えた歴史地震研究の必要性である。この点については、勇退された北原前会長の言葉が特に印象的であった。

北原氏は退任の辞で、「よそ者のつもりで参加してきました」と、いみじくも語られたように、筆者のような文系の人間にとって理系分野の研究はなかなか接し難いものであった。しかしながら、「文系の人間も理系分野の最新の研究状況を肌で感じてほしい」という北原氏の思いにも現れているように、歴史学のアプローチ方法だけでは歴史地震の理解に限界がある。かつて北原氏は『歴史学研究』第841号(2008年6月)の「学界だより」において本研究会への歴史学研究者の参加を促しているが、なかなか実現していないのが現状である。総体的な歴史地震の把握のためにも、文系・

理系分野の一致協力が必要不可欠である。歴史学の研究者は自らの殻に閉じ籠るのではなく、積極的に他の研究分野との交流を進めるべきである。

その一方、今回の理系分野の報告の中には、論理構成に疑問点を感じる報告も少なからず存在した。過去の事象を知るには、様々な歴史資料(=史料)から紐解いていくことになるが、その際には活用する史料が作成された経緯や時代背景など史料自体の性格を十分吟味しなければならない。このことは歴史学の分野では最初に学ぶ基礎中の基礎である。しかし、いくつかの報告には、無批判に史料を活用している例もあり、聊か違和感を覚えた。研究の精度を高めていくためにも、論理構成を行う以前に十分な史料批判が求められる。

本研究会の最大の特徴は多種多様な分野の研究者が集っていることである。理系と文系、相互の学問領域の方法や成果に学ぶことができれば、歴史地震の研究はもう一歩先に踏み出すことができるのではないだろうか。

#### §5. おわりに

以上のような感想を抱きながら、改めて様々な研究者が集う本研究会の重要性を感じた。歴史学の分野では、先頃、『歴史学研究』第884号(2011年10月)が緊急特集「東日本大震災・原発事故と歴史学」を組んでおり、歴史地震への関心は高まっているが、まだ歴史学の領域内で動いている段階である。そうしたなか、学問分野を問わず歴史地震研究を志す者を受け入れる本研究会の場はとても貴重であり、学問間の交流の機会を提供している。文系の研究者はもっとこの場を積極的に活用すべきだろう。

来年度、横浜における第29回研究会では、本年度の流れを継承しつつ、学問間交流の動きを促進させるとともに、本研究会のさらなる発展と地域社会への防災意識の普及をめざしていきたい。

写真は林能成氏にご提供いただきました。